総務経済 常任委員会 Report

調査▶高崎玉村スマートＩＣ周辺開発の現状と今後

町の知名度とブランド力を高め活気あるまちづくりの推進を

所管事務調査日：令和５年３月６日

委員長　浅見武志
副委員長　小林一幸
委　　員　堀越真由子
松本幸喜
月田　均
髙橋茂樹

玉村町の新たな玄関口となった高崎玉村スマートＩＣ周辺開発の現状と今後について調査した。

●道の駅玉村宿の現状

新型コロナの影響で、令和２年度は来場者数、売上はともに減少したが、令和３年度以降は回復傾向にある。手狭となっている駐車場の拡張工事を進めるとともに、道の駅に一時退出しても２時間以内は追加料金がかからないＥＴＣ２・０（賢い料金）の社会実験を実施している。

●高崎玉村スマートＩＣ北地区工業団地の進捗状況

分譲予定区画は７区画であり、分譲候補者は令和５年３月に選考、６月に売り渡し決定予定である。造成工事は県企業局が実施しており、12月末時点の進捗率は約64％である。

●観光交流拠点公園構想調査

町の知名度とブランド力を高め、活気あるまちづくりを推進するため、道の駅玉村宿の南側区域において、ＰａｒｋＰＦＩ等を活用した観光交流拠点となる都市公園整備の可能性を検討している。調査スケジュールは、令和４年度及び５年度に公園基本計画の作成、企業へのサウンディング調査を実施し、その調査結果により、事業実施の可否を決定する。

造成工事が進む「北地区工業団地」

拡張工事が進む「道の駅玉村宿」の駐車場

活気あるまちづくりを期待（道の駅玉村宿にて）

まとめ

高崎玉村スマートＩＣ周辺開発については、町の将来の発展を見据え、それぞれ事業を進めているところである。

調査過程において、委員からは北地区工業団地の分譲後の通学路の安全確保や工場排水の管理及び水質等の公害防止などについて、地域から懸念の声もあるなどの指摘があったが、町は適切に対応するとのことであった。

一方、高崎市でもスマートＩＣ周辺開発を行っており、お互いに相乗効果を狙った開発ができればと考えるが、高崎市での集客が流れてくるのを待つのではなく、玉村町に直接来たくなるような開発が進められることが望まれる。

高崎玉村スマートＩＣ周辺地区は、玉村町の玄関口となるため、町の知名度とブランド力を高め、活気あるまちづくりを推進する上でも、今後、観光目的としての拠点づくりにも力を注ぎ、いつでも気軽に立ち寄れるようなより良い開発となることを期待する。

民生文教 常任委員会 Report

調査▶教育支援センター「ふれあい」の現状と今後

『教育と福祉の連携強化による支援体制の充実』を促す

所管事務調査日：令和５年３月７日

委員長　新井賢次
副委員長　羽鳥光博
委　　員　備前島久仁子
三友美恵子
宇津木治宣
笠原則孝

●教育支援センター「ふれあい」

町内に在住する不登校児童生徒の集団生活への適応を促し、社会的自立に向けた支援を行うことを運営目的としている。

玉村町教育研究所における教育相談事業の一環として、玉村町教育委員会および管内各学校・園との連携のもとに、教育相談、教育支援等を組織的・計画的に行っている。

学校教育課から、当該施設の概要説明及び不登校児童生徒の現状と支援について説明を受けた後、教育支援センター「ふれあい」に移動し、現地で通室児童生徒の状況と取組について調査を行った。

対応する職員の温かく熱い思いを感じました

支援員から説明（スタッフは支援員２名、相談員２名）

●受入状況（令和５年１月末時点）

令和４年度：小中学生　計７名
※不登校児童生徒数（59名）
内訳：小学生17名、中学生42名

●開設状況と日程

学校の休業日を除く月～金
午前９時～午後３時
期間：４月～翌年３月まで
※長期休業期間は状況に応じて設定
午前：個別活動（学習、読書など）
午後：集団活動（軽スポーツ、制作活動、清掃など）

まとめ

教育支援センター「ふれあい」は、子供の状況に応じた支援を行う重要な施設となっている。支援員から「通う子供たちは少人数ではあるが、学校に行けない子供たちのセーフティネットのひとつとして、次の新しいスタートを切り、もう１回学び直したいとの思いを強くしてくれることが目的であり、明日も来ようかな、やればできるんだと思えるように、励ましている」との話があった。

主な行事として、野菜づくり、調理実習、サイクリング、パソコン学習、社会科見学、先輩の話を聴く会、ものづくりなどを行っている。

現地調査を通じて、運営目的は十分に達せられていると感じた。支援員２人の、児童生徒に対する温かく、熱い思いも強く感じた。町としては、さらなる施設・設備の充実を図る必要があると思われる。

今後の取組について、ふれあい人材の拡充・教育と福祉の連携による支援体制の充実を図っていくとしているが、着実に進めてもらいたい。